吉田香雨戲著

當世作者評判記

大華堂發兌

本間文庫
文庫 14
D 31

文庫14
D31

東京帝國大學

乍憚口上

我れ頃日流行のインフル圓左衛門に取付かれて凡そ半月ばかり病蓐に在りけるが一夜大熱に冒されて左の譫言を口走れり固より譫言の事にしあれば取止めのなきは勿論なり然るに取止めありとして患者に喰て掛るが如きは是れ野暮の極天といふべし我文學社會に斯る無粋漢なきを信ぜ

近來作者の人數頗ぶる多し我れ一々其名を記せぜ故に這般幸ひにして我が毒手に觸れざる人も多かるべし其は又後日機會を見て將に大いに評判する所あらんとす

余は是れ一個の商人なり當時文筆を以て妻子を養ふ者にあらぜ故に多少文學界にお馴染あるにも拘はらぜ誰に遠

慮も内心に思ふ所を打出して強て褒貶を自儘にせゞ是れ我ながら微妙も出かいたうと自慢して毫も良心に恥る所なしと思へり只徳義上知友に對して聊かも氣の毒に存ぜるのみ乞ふ幸ひに之を恕せよ

口上あら〳〵件のごとし是より目錄を御覽に入れ續いて本文に取掛るべし其爲口上ハイ左樣なら

時に明治廿四年一月の風吹荒びて寒く冷たき日巨燵の中に縮かまりつゝ

平日の濡事師此度限りの敵役　吉田香雨識

四方御客樣及御作者樣　衆中

目錄（次第不同）

美妙齋主人……山田武太郎君
紅葉山人……尾崎德太郎君
漣山人……巖谷季雄君
饗庭篁村……饗庭與三郎君
天囚居士……西村時彦君
春の屋朧……坪内雄藏君
仰天子……武田穎君
半痴居士……宇田川文海君
湖處子……宮崎八百吉君
忍月居士……石橋友吉君
香雪散人……前田健次郎君
三昧道人……宮崎璋藏君
南翠外史……須藤光暉君
南新二……谷村要助君
露伴子……幸田成行君
思案外史……石橋助三郎君
鷗外漁史……森林太郎君
眉山人……川上亮君
正直正太夫……齋藤賢君
半牧居士……岡野武平君
愛溪逸史……木内伊之助君
學海居士……依田百川君

魁　蕾　子……古川精一君
藺　　溪……三品長三郎君
嵯峨の屋お室……矢崎鎮四郎君
二葉亭四迷……長谷川辰之助君
鐵腸居士……末廣重恭君
採菊散人……條野傳平君
櫻痴居士……福地源一郎君
幸堂得知……鈴木利兵衛君
思軒居士……森田文藏君
梅花道人……中西幹男君
涙香小史……黒谷周六君
龍溪居士……矢野文雄君
柳浪子……廣津直人君
漁山人……姓名不詳
霞亭主人……渡邊勝君
青萍居士……末松謙澄君

早稲田大学

當世作者評判記

美妙齋主人……山田武太郎君

吉田香雨戲著

其身硯友社より出で、別に言文一致の一派をひらき自から一見識を押立て文檀に飛出せしは美妙齋主人なり主人の文章は初め夏樹立において大に見るべき所ありしが其後思想の微細に入りし爲にや又はイヤに氣取り始めし故にや醉漢の管の如く爺嫗の異見の如く同じことを二度も三度も繰返すには讀者も殆んど閉口せりとぞされど主人は才子なり先に金港堂を煽動こみて都の花を發行せしめ自から主筆の坐に直りて花車を曳出しいちご姫を紹介し又た國民之友の大附錄に裸体美人を拈出して大いに衆目を

ひきたるなどは兎も角も手柄といふべし其後は別に是ぞといふ名作も世に出ぬ只いらつめ學校の教師となりて小學小説簡易科の生徒を相手にお茶を濁し居らるゝとは偖も羨ましき身分ならずやされど主人が近作の小説彼の教師三昧は新作十貳番否な五番中の秀逸にして其趣向文章とも他の得て及ぶべき所にあらず兎角趣向の嶄新なるは主人が專賣の手際といふべし只山鳥の尾の長々しき國民之友の韻文論は世人神妙に讀むや否や我れ甚だ覺束なく思ふなり

三昧道人……宮崎璋藏君

三昧道人は漢學者なり小説は固と得意の人にあらず然るに得意の漢學を棄て、失意の小説を取らんとは氏も亦た

物好の人たるを免れず而して道人の小説中世に持囃されしもの幾許かある松花錄は我れその不評なりしを知る桂姫は我れその出色ならざるを知る而して追羽子ふた夫婦は我れ其普通の作たるを知るのみ未だ道人の作として世を驚かし人を感ぜしめしものあるを見ず然るに道人の辛抱强き敢て是等の不評あるにも拘はらず近來は又近松竹田の流れを汲みあはれ小説院本合体の新文章を造成して名譽を後世に遺さんとす嗚呼寔に盛なるかな然れども道人の文章は輕妙なり篇中また誦すべき節少なからず願はくは道人著作の勞を惜まずして續々新著を出されんことを果して然らば道人の作として價値ある物を見るに至るも蓋し遠きにあらざるべし

紅葉山人……尾崎德太郎君

明治の新文學界に生れて徒らに元祿の昔を忍び口を開けば西鶴々々と嬉しがるものは誰ぞや當時小説の大家と聞こしし紅葉山人その人なり山人の西鶴を信ぜるや厚し而して其信仰の念の那邊にあるやは我未だこれを詳かにせぜといへども蓋し其文章に於けるよりも寧ろ其氣宇の快活なるに在るもの、如し然れども西鶴は西鶴なり紅葉は紅葉なり元祿時代好色の有樣を氣取りて之れを明治の今日に寫し猥褻見るに忍びざるがごとき惡風俗を成長せしむるともあらば是れ我が文學の罪人なり然れども山人は素より是等無分別の人にあらぜ彼の姦通を取持ちて腹一文字に割さばきたる俠客關東五郎の如きは必竟上州男兒の

心腸斯くあるべきを寫せしのみ色ざんげと云ひ此ぬしと云ひ伽羅枕と云ひ紅懷紙と云ひ何と云ひ彼と云ふ山人が自著の小説皆な色情の出來事にあらざるなきは蓋し浮世は色と酒とふ金言を奉戴して世の眞情を寫せるのみ而して山人の出世相撲否な著作は實に色懺悔にありと云へば其生涯の著作中終始色氣の付纏ふも亦た以なきにあらざるべし

南翠外史……須藤光暉君

政治と文學とは氷炭相容れざるの趣あり然るに政治を以て文學に吹込み政談を以て人情に冠せんとす故に文中理屈臭き所あり演説臭き件あるを免れぜ是れ近時政治小説とか何とかいふもの、世に癈れたる所以なり南翠外史は

か、る拙手段を取る人にあらざるも又往々にして政味を調合するの一癖あり決闘を挑み爆裂彈を飛ばすなど隨分危險なる仕組あるを同氏小説の得意とす然れども近時この種の小説は甚だ世間に流行せず趣向富饒文章流麗の名作も今や少しく下火にならんとするの傾きあり然れども國民之友は大ひに外史の小説を信じ前に破魔弓の不評なりしにも拘らず本年新年の大附錄にも又罔両なる新著を掲げて大いに價値あるものと披露せり蓋し外史は多能なる所謂る時代小説を善くし又世話小説を巧にす何を苦んでか伯爵令孃ダイナマイトの小説にのみ焦心して自から不評を招かるゝや嗚呼外史よ姑らく改進新聞の記者時代に立戻りて以て固有の妙枝を發揮せられよ然らば天下數萬の讀者は君を推て應に文壇一方の大將軍と仰ぐなるべし

漣山人……巖谷季雄君

漣山人は文庫出身の小説家なり近來熱心の効ありて大いに技倆を上げられたりと聞くしが此度第一號を發兌したる少年文學の先陣としてこがね丸を著述せられぬ近年かゝる小説の世に出ざるこそ幸ひなれ漣山人の名は全國各新聞雜誌上に顯はれて大いに稱賛を蒙りたり之を彼の徒らに大家ぶりて碌でもなき駄小説を作り四方八面より攻撃を受くる作者に比すれば其優ること幾許ぞや山人の拔目なき先づ少年の歡心を買ひ次に壯者の愛顧を得、後竟に黒人の喝采を博せんとす秩序ある小説家よ改進的如才なき

文學者よ我れ君が好手段に感ぜ我れ君が好計畫を賛す

南新二……谷村要助君

君は有名の通人なり今の新聞記者及び小説家中その通を角べんには君が憤鼻褌をだも擔ぐべきものあらぜといふ又君は劇仙なり芝居一道のことに掛けては當時肩を並ぶるもの少なかるべし然れども其小説に至りて未だ斯の如くなるや否やを知らぜ君又茶番が得意なり故にその小説は兎角滑稽解頤的の調子に流れその洒落は例も茶番的の古臭味を帶びざるべなし左れば其洒落は古風なり當世とは言ふべからぜ其滑稽は時代なり亦た近頃の穿少なし嘗てやまと新聞及び新小説等に小説をかゝげ近頃又新作十二番に鎌倉武士を出されたり其武士の伊豫ぶしか土佐

ぶしか一中ぶしか豐後ぶしか大津繪ぶしかヤンレぶしか但し又なまくら武士か本武士かは我未だ鑑定せざれど思ふに例の今古折衷的の洒落にして左ほど感ぜべきほどの物にてはあらざるべし蓋し君は小説家と云はんよりは寧ろ新聞の雜報家劇評家などいふ方穩當ならめさるにても亦君は明治文廓の一通士なるかな

饗庭篁村……饗庭與三郎君

根岸の篁村か篁村の根岸かと一時はむら竹に宿る小雀をさへ落せしほどの勢力ありし竹の舍の主人篁村君はどうした表裏の瓢簞やら近來輕妙の筆を斷て眞の隱居と澄されたり蓋し新作十貳番中の血祭り勝閧の變じて負閧となりしがためか夫とも他に原由ありてか我れ深く密室に立

入らぎといへども兎に角この名人に若隱居をさせしことと返す〳〵も遺憾なり聞く君は近來得意の八文字舍流を棄て近松巢林宗に入られしとか是れそも〳〵間違ひの始うなり成程近松は名人なり然れども小説家としての近松は如何あらんか自笑其積は上手なり昔し彼等が著はせし數百番の小説中一も愚かなる作あるを見ぎ其文章は卑近にして俗ならぎその趣向は簡明にして氣拔なり亦た近年の青文學熟文章の比にあらぎ然るに君の之れを棄て彼を採らんとする所存こそ片腹痛く存ぎるなれ殊に君は今其積今自笑との名譽あるにも關はらぎ多年の恩義を無にしては位牌に對して相濟むまじトハ言ふものゝ君はまだ彼等が文の神髓を得ぎ君が平素の筆を評せば所謂る氣質物の

類にして未だ彼等の名作たる小説に似たる跡あるを見ぎ是れ我等が君のために深く惜む所なり然れども世に八文字舍の文章を善くする者寔に少なし其これあるは君と香雪散人の二氏あるのみ君乞ふ其文を練磨してます〳〵光彩を放たれよ近松の筆西鶴の文亦た何ぞ羨むに足らんや

露伴子……幸田成行君

露伴子は現今の小説家中一の奇癖ある名人なり我れ君が一刹那てふ小説を嘗て文庫の誌上に見て是れ凡人にあらぎと思へり果せるかな其後風流佛を著はして名譽を博し奇男子を作りて喝采を博せり國民之友の小説一口劍は少しく鍛の足らざる所あるも日本の文華の緣外の緣は大いに見るべき所あり然れども君の小説は禪臭味多く君の文

章には經文質また少なからぬ故に脫俗悟道の讀者ならぬば其意を解し難しといふ是れ甚だ高尙なるに似たれども其實は大いに然らぬ元來子の小說は所謂一人合點の我面白流義にして他人の讀で分らざるも敢て頓着せぬもの、如し故に其小說の結末に至りては往々判じ物に類するありて讀者の頭腦を苦しましむると大方ならぬ之を脾肉といふべきか將又澁味といふべきか我れ不日維摩の一室に閉籠りて是が判斷を下さんとす左は言へ露伴の小說は分らぬ所が命なりと辨護を試むる人もあらば我敢て爭はぬカヲ〳〵勝手にせられよといふのみ

天囚居士……西村時彥君

天囚居士の尊號は屑屋の籠と共に世に出でたり當時居士

の評判甚はだ高く或は天囚居士じやといひイヤ天囚が本當じやと云ふて知らぬ同士が爭そへりとぞ兎に角馬琴翁の名著質屋庫の醜案としては最も價値ありと云雖し斯る作者の今迄何處に潛みしやを疑ひ後世また恐るべしなど噂せしが其後は是に續いての名案なく且その居處さへ定かならねば居士は何處ぞと鉦太鼓で索ね廻る者ありしが幸ひ火元イヤ在處が大阪朝日新聞社内と知れて先々安心仕りたる次第なり偖も居士は何故に其後傑作を出されざるぞ居士が學識文才はあつぱれ一個の小說家として恥かしからぬ拔倆なるに……然れども爰に少しく小言あり居士は常に小說の考案よりも寧ろ我文章を他に誇らんとするの一癖あり己は漢文もよく出來るぞ又當節は和文も中

々ひねくるぞお望みならば院本文も列ぬべく所望とあらば滑稽文もたゝむべしと例も小説の篇中に文章の見本のみを陳列して文字に齷齪せらるゝは未了簡が若い〳〵と言はざるを得ぬ顧はくは文章は先づ其位ゐで充分として趣向に心を用ゐられよ然れば居士の小説に歴史の跡も隠るべく實事譚の熱も收まるべし實に文章は花なりけり一時人目を樂ましむるも風が吹けば散り失せる(九太夫の臺詞を借用)又考案は實なりけり長く其味を後世にとゝめて以て人の記臆に印すべしとは居士の流儀でア、堅いかな

思案外史……石橋助三郎君

思案外史は我樂多文庫創造者の一人なり然れども其出世遲緩にして紅葉美妙に及ばざると遠し是れ外史が平生春水を信仰して屢々唐丹的の人物を描き米八仇吉風の女性を出して將に當世に惡文學を傳へんとするが故にあらぬや然れども外史も一個の小説家なり豈意味なくして斯る小説を作爲するの人ならんや必らず外史自からは心に期する所あるなるべし只我等の淺學なるそれが深意を知らざるのみ

春の屋朧……坪内雄藏君

維新後小説の衰頽を嘆じ自から奮つて之れが改革者となりし者は誰ぞ實に春の屋朧氏なり我等双手を膝に當て、君が功勞を謝せざるを得ぬ然れども之に連れて勃興せる新文學の弊害も亦た實に少しとせぬ是れ改革者の罪なる

か否な決して然らざるなり一利一害は數の免れざるところ豈世の先覺者ども言はるゝものが區々たる後難を顧みて躊躇因循すべけんや春の屋氏は實に明治新文學の輸入者なり發起者なり先達なり猿田彦なり之を芝居に譬ふれば例の種蒔三番叟なり之を淨瑠璃に喩ふれば少しマヅイが露拂ひなりその小說書生氣質妹と脊かゝみの二名著は以て當世俗流小說家の膽玉を冷すに足れり且氏が物せる細君のごときは最も非凡の妙作にして近年の小說中我れか、る傑作を見ざる宜なるかな其評判全國に轟き渡りて爲めに國民之友の賣高を增すに至れり然れども氏が近來の小說は稍その妙所を落したりき殊に讀賣新聞に揭げし羅修まのたち漢、魏、吳、蜀誌てふ一篇の如きは最も拙劣の作にして小

說にあらざ脚本にあらず滑稽にあらず眞面目にあらざるつぱりぱんと譯の分らぬ雜談なり是れ春の屋氏の作なるかあゝ臚氏の筆なるか我れ氏が舊作を追懷して轉た痛惜に堪へざるなりされど氏の文章は近時俳文を折衷して頗る上品なるのみならず雅味自から備りて已に一家の風をなせり是を明治小說家の文体として後世に傳ふるも決して耻かしからざと信ず嗚呼、氏は實に我國文場の園洲なるかな

鷗外漁史……森林太郎君

獨逸文學を以て有名なる陸軍々醫學校の教官を以て有名なる鷗外漁史は近來メッキリと賣出され大いに病家ィナ聲價を增されたりといふ君が高尙なる詩論は我れ常に

がらみ草紙にかいて閲讀せり君が巧妙なる小説は我れ時に國民之友に於いて拜見せり然れども大言俚耳に入りがたく良藥口に苦々しき道理にや世人往々君を以つて學理的文學者と稱せり是れ實に博士に對して失言の至りといふべし然れども是又無理ならぬ言草なり蓋し博士の文章は學理的の用語多くして實際的の妙味少なく恰も頑愚の病者を捉へて解剖談をなすが如く甚はだ大業過るを以て讀者に危懼の念を抱かしむるの嫌あり是れ博士の學識人に超るにも拘はらず常に凡俗に用ゐらるゝとの淺き所以なり然れども彼の舞姫及びうたかたの記の如きは最も非凡の傑作にして名醫の感賞する所なり嗚呼博士よ願はくはゲーテー、シルレルの分量を少しく減じて誰にも服用し

得らるべき名劑の調合に一層注意あらんことを是れ我々文學病者の常に熱病否な熱望する所なり

仰天子……武田穎君

仰天子は大阪小説家の新顔なり其名を世人に知られたるは實に都の花を以て嚆矢とす子が文章は初め言文一致なりしなり特に一調子變りたる大阪風の言文一致にてありしなり而して其言文一致家中大阪風を寫せるものは君を以て巨擘とす君自らもまた斯く心中に許すなるべし然るに近來は流行の西鶴エンザに感せられて大いに此熱を上げらるゝ由あはれ俳園否な肺炎に變症して大病人となられざるやう豫て注意が肝要なり然れども君は又作者中の才子なりその言文一致と云ひその西鶴の流義と云ひ着々

時の流行に投じて筆法を變ぜらるゝの一段は實以て機敏といふべし語に曰く聖人は物に凝滯せずよく世と推移るとされば子は又作者中の聖人か夫とも君子の豹變家(?)兎に角目覺しき働人といふべし

眉山人……川上亮君

眉山人の小説は我れあまり感心せず否な感心するほどに澤山に見ざるなり然れども君が俳文に至りては殆んど天下絶類といふべし文庫連中小説を善くするもの當時紅葉山人あり又江見水蔭の如きあり然れども其俳文に至りては君が足元へだも寄り付くものなしといふ嗚呼君は小説家にあらずして實は俳文の名人なり也有許六も跣足とは敢て過賞にあらざるべき乎世に俳諧の天狗多し尤も自稱

の)然れども俳文の達人少なし君ソレ此隙に乘じて修業せば以て俳名を天下後世に傳ふべきか我れ謹んでこれを君に勸告す

半痴居士……宇田川文海君

關西第一流の小説家とは大阪毎日新聞の大言なり然れども氏は實にこの大言に負かざるの作者ならん氏の得意とする所は時代小説卽ちお家物にあり而して氏は又劇道に通じ嘗て數々脚本めきたる物を作れり只氏のために惜むべきは此長所なる時代小説を好まずして飜譯臭味の人情的小説を著述し屢々不評を招かるゝと是なりき然れども氏は中々に健腕なり時に多くの小説を引受け一々筆書き飛ばさるゝと電光石火も啻ならず中には大いに倉卒の作

ありて聊か君が名譽に關せざるやを疑ふもの亦なきにしもあらざりしが近來大いに悟る所ありたるにや其受持小說に熱心をこめらるゝ段實以て感服の至りなり兎に角お家物に至りては君の右に出るもの關西に少なしイヤ(君の口吻)關東にも多からざるべし只此上は腕を揮つて君が技倆を表はすべき大著述こそあらま欲しけれ

正直正太夫……齋藤賢君

小說評註主義の開山冷罵嘲笑的批評家の家元正直正太夫殿は實に我等の畏友なり殿嘗て娑婆の文學の腐敗せるを嘆じ一度冥土に出發し閻王の廳に到りて大いに文學を論じたりしが彼等俗臭紛々として取るに足らざるを看破してより再び娑婆に蘇生りて例の憎まれ口を叩かるゝ由聞、

及びぬ殿は文學界に滿身の不平を以て生れ殿の眼中世に惡文學ありて善文學なるものの無きもの、如し然れども殿乞ふ少しく反省せよこの紛々擾々たる文學界は未だその潮流定まらず其定まらざる所が命なり否な殿等が冷罵嘲笑を逞しくするの秋なりけり若し當世の小說家が悉く高妙名人なるに於ては殿が破邪的の鉄槌も亦用ふるに所なからん殿が現世に名あるもの蓋し平凡文學者のお蔭ならぞや

湖處子……宮崎八百吉君

湖處子の歸省は我れ甚はだ之を喜ぶ湖處子の新体詩い我れ之を喜ばず蓋し我の喜ぶものは其作の面白きが爲めのみ我の喜ばざるものは亦其作の拙なるが故のみ湖處子は

雅學に疎遠なり故に其詩に風流の趣なし湖處子は和文に御無沙汰なり故にその語格調はも漢字に依て和語を訓す故に甚はだ讀み苦るし出たらめに依て一詩を爲す故に手爾遠波整はも尚甚だしきに至りては假名遣ひに誤謬あり凡そ詩人と自稱して文界に獨歩するもの豈少しく是等の心得なくして可ならんや然れども其熱心に詩文を作り其丹誠に詩想を發表せらるゝ、人は當世先づ君を推す聞く君は文學者中の年少なりと不日其功を積むに至らば當に詩家の妙手となるべし今は是れ修業中のみ豈深く咎むるを要せんや

半牧居士……岡野武平君

居士ハ大阪朝日新聞社の元老なり其小説中別に出色の物

とてはあらざるも兎に角敏腕にして勉強家なり居士の小説一日に新聞紙に出ざるときは數萬の讀者頻りに之を促がすといふ亦以て讀者に輿望あるを知るべし是れ居士が多年の經驗によりて得たる所の結果なりといへども抑も亦居士が平生自我獨樂的の文章を棄て讀者の機嫌を取ると專一とする故にやあらん然れども人に七ッの癖あれば我にも許せ抹茶の道と頻りに濃茶に凝らるゝより稍もすれば其小説の文中に書畫珍器などの講釋出でゝ心なき俗物に欠伸を催さしむるとありといふ左れど近來ハ牧野牛醉子といふ相談役ありて大いに此弊を去りし由先づ大体ハ無難にして器用なる作者といふべし

忍月居士……石橋友吉君

居士は一の批評家なり小説家とは言ふべからぞその烟々たる批評眼を以て新著を猛評し去るの勢なか〳〵に當り難し然れども其小説に至りては甚はだ以て感服せぞ露子姫は何事ぞ宜しく世間の評判を聞くべし彼のお八重に至りては稍巧妙の節なきにあらざるも是又居士の作として嘖々すべきほどの物にあらぞ居士が批評に巧者なると共に其小説に不巧者なるは世間既に定評あり亦た何ぞ多言を要せん諺に曰く二兎を追ふ者は一兎を得ぞと居士幸ひに以後小説の筆を斷て批評にのみ熱中せられよ然らざれば居士が獨逸より齎らせし金箔付の文學もまた地に落る時あるべし

愛溪逸史……木内伊之助君

逸史は大阪毎日新聞の花方なり根が商人だけありて萬事に如才なき所あり三田福澤氏の門派にありて慶應技熟して後記者となりしが其合棒は例も香川蓬洲氏なり蓬洲氏は粹人にして淨瑠璃に通ぜ故に毎日新聞には絶ねぞ院本の新作を揭ぐその考案は常に香川君の手裡になり其文飾は逸史の筆にかゝるといふ之を要するに逸史は淨瑠璃語のごとく蓬洲氏は三味線彈のごとし両者相俟つて始めて一番の淨瑠璃を作り以て讀者の喝采を博すといふ但し文學者の喝采は如何あらんか我れ未だ之を聞かぞ抑も院本の作は近松門左に頭を擡げ半二、出雲、海音の先達又た並木西澤、三好の先輩いづれも汗水になつて苦心せしほど最と六ッかしき物なるに逸史の健腕蓬洲子の才思なる容易に

之を作るとは偖も見上げた腕ならぞや嗚呼、近時院本の作者に乏し只之を作るもの逸史蓬洲の二氏あるのみ其巧拙に至りては我等批評し能はざるなり

香雪散人……前田健次郎君

散人は作者中の古實家なり其書畫の鑑定に於ける其骨董の目利に於ける殆んど夫者も及ばぞといふ而して其小說に至りては和文の技倆に及ばぞといへども和歌の手ぶりに若かぞといへども亦以て見るべきもの少なからぞ彼の轉宅叢談の如き又は化物屋敷の如き最も江湖の好評を博せり君又八文字舍の文体を善し巧みに諸家の文流を擬す然れども小說は敢て君の長技にあらぞ然り君の長技にあらぞ故に君又多く小說を書、ぞといふ嗚呼、君は我が文學界中多技の人なり只小說の一点に少しく欠くる所あるとも我れ一向遺憾とせぞ君また屁とも思はざるべし

學海居士……依田百川君

居士は熱心なる文學者なり小說を作り脚本を作る其腕前中々老儒の業にあらぞ若し居士をして一年幕内にあらしめば鶴屋南北を張飛ばし並木五瓶をも蹴倒さん然れども惜いかな居士未だ實地に暗く其脚本は以て舞臺に上せ得べきや否や只文學の上よりして其臺帳を拜見せば中々立派なるものなるべきも之を實地に適用せば多少欠点なき能はぞ然れども脚本は最も居士が自慢する所なり彼小說に至りてはどこ迄も歷史的の觀念失せぞ稍もすれば軍書本を見る如く四角四面の言語ありて大いに讀者を倦ま

むる流儀ありされど居士の文章は馬琴にして馬琴にあらぞ蘭山にして蘭山にあらぞ實に一種いふべからざる高尚優美の雅調にして之を貴族的小説の文章といふ我れ甚だ此流の文章を好む世間居士の小説を讀むもの須らく先づその文章を三誦すべし

魁蕾子……古川精一君

魁蕾子は爲永一派の小説家なり故に妓流的人情を寫すに妙なるも事態を叙するに精ならぞされど氏の筆は素人好のする徳あり新聞の小説家としては先々評判の宜き方なりされども當世文學者の口に掛ては左はど賞美もせざるべきか君近頃神戸又新日報の記者となりて艶麗の筆をふるひ大いに人氣を増せりといふ實に樣々の浮世なりけり

實に樣々の人情ありけり

思軒居士……森田文藏君

居士は探偵ユーベルを譯述して當時文學界を震動せしめたるの文傑なり而して氏は最も文章に長ぞ氏が一學手一投足も亦た皆文章となつて世に現はる嘗て同好會の列に入りて新小説(雜誌)の助筆となり今は青年文學會に在りて漢書の講義に餘念なしとぞ氏は又隨筆体の文章を善くし堅き中にも聊か和らかき妙所あり然れども氏が文章は例も我家の馱味噌をあげて人に强るの辛味あり卽ち尤憶記のごとき其一なり然れども當世氏が如き文才子は亦た多く其類を見ぞその自著の小説は善いか惡いか姑らく措きその文章の雄健なる其批評の公平なる實に感服の至りと

いふべし君が明治の文壇に一旗幟を押立て敵の威風に靡かざるは正に是れ文陣有爲の御大將兎に角に敬服々々

蘭溪……三品長三郎君

蘭溪氏は新舊折衷的の小説家なり故に時代物を作り又世話物を作れり其文体は稍馬琴を摸する所あれども常に艶麗を衒はんために例も五七の口調を用ふ作意敢て感心は致さぬといへども其熟練亦た近年若輩の比にあらぬ然れども其趣向や、陳腐に傾ふくの嫌ありて作中當世物の少くなきは亦た以て遺憾といふべしされど氏の小説も素人の評判よく改進紙上いつも喝采を得らるゝより今は大いに用ひられて頗ぶる羽振よろしと云へり夫れ新聞紙の小説と雑誌其他冊子物の小説とは自から其間に逕庭あり蓋し冊子物の小説は讀者自から高尚なるも新聞紙の小説は所謂る素人相手なれば作者宜しく其心なかるべからぬ左るに近來の若手連は是等の事情を察せぬして獨自合點の筆をふるひ高慢ぶつて書出すゆゑ竟に失敗を取るに至る嗚呼若手の文學者にして新聞小説家に變化するもの乞ふ少しく注意召されよ

梅花道人……中西幹男君

作者にして一時高名を博するものは必らぬ皆大著述あり馬琴翁の八犬傳に於ける種彦の田舍源氏に於ける一九の東海道膝栗毛に於ける皆その原因ならざるいなし然るに梅花道人は何の原因(即ち大著述)もあらぬして忽ち高名の作者となれり佛家の所謂る果報とは蓋し氏が上をこそい

ふべけれ君先に讀賣新聞の記者となりて何やら短篇小説を著はし間もなく國民新聞社に入りて滑稽小説を編みたるが突然出家を想起して圓頂黑衣に姿を扮し飄然東都を發足して行方定めぬ雲水の客となりぬ夫がため國民紙上の小説も半途にしてドロンとなり讀者の失望多かりしといふ君が著作の中に就て最も世評の宜かりしは彼米僊氏が描きたる靜御前の畫賛なり此外君の著述として世に著るしき物を見ぞ蓋し君は著述の割合に比較して頗る高名の作者といふべし抜ぬ太刀の功名とはソレ將君をいふならんか

嵯峨の屋お室……矢崎鎭四郎君

嵯峨やおむろの花盛りてふ俚曲の文句から思ひ付たる洒

落た戯号に似もやらぞ君は是れ宇宙主義の大先達詩人兼哲學者風の小説家または眞理の發揮者なり故に其小説は近來やたらに高尚になり亦ひとよがり風の妙所を見ぞ然れども當今の作者中詩想に富むものを選擧せば君は第一の候補者なりと女學雜誌記者は褒めたりけり兎に角君が小説は西鶴春水風の猥褻なく三馬一九流の滑稽なきも社會の人情世態を寫し眞理を發揮するに於ては頗る名手と言はざるを得ぞ君が小説ゑやきの如きは是れ僅々たる短篇ながら亦その技倆を見るに足るべしあゝ今日の大詩人よ當世の哲學者よ希はくはます〳〵眞理の發揮者となれ而して又小説家てふ觀念を何處迄も失なふ勿れ

涙香小史……黑岩周六君

佛國探偵小説の譯者黒岩周六先生にその疑獄の小説において最も江湖に評判高し人耶鬼耶の譯述以來自由新聞の紙上に於て都新聞の紙面に於て續々として出るもの皆な探偵小説の骨髄にあらざるなし而して其文章の通俗にして妙處ある讀む者をして快と呼ばしめ聽く者をして妙と言わしむされば君が小説い世間一体に流行して白黒チヤンポンに持囃され大いに名譽を得られたりとぞされど悪体を吐く者は君の小説を評して曰く是れ萬遍一律の趣向なりとァ、夫れ眞個にさうかいな我れ實はあまり多くも讀まざるゆゑ此説の當否を知らぎ

二葉亭四迷……長谷川辰之助君

英國小説に春の屋あり佛國小説に涙香あり獨逸小説に鷗外あり露國小説に至りてはソレ只四迷君あるのみか君が小説あひびきは國民之友の紙上に見られたり然れども其後開拓を怠りしか近時青草茫々たる露國小説の土を見ぎ蓋し君の文章を今少し和らかくして新奇を好む日本人に露國文學の旨味を喰はさば舌打をして賞翫すべし惜いかな半途にして君は其文筆を棄てられたりあゝ栴檀は二葉亭の戯號香はしく今尚ほ文園に芬々として夫が餘香を匂はせり

龍溪居士……矢野文雄君

芳草か蓬窓かコチヤ一向これを搆はぎ江楓か紅楓か我れ穿鑿に遑あらぎ然れども氏は是れ文檀の一傑なり其文明小説の先陣として先に經國美談を著はし近頃また浮城物

語を著作せり其大砲の何サンチメートルなるや否や又軍事の懸引の盧梅如何あるべきや否やは拙一向頓着せぬ然れども兎も角も小説は人の目に入り心に感じて面白しと思ふものを上乗と爲すとかや氏が小説は文明的水滸傳なり氏が趣向は長持を以て下駄箱とするの類なり而して素人ゝ之を喜び黒人は喜ばぬ只其文章の巧妙なるに至りては感服するもの多しといふア、政治家にして文學者を兼るもの氏を措て誰かある乞ふ次項の作者を見よ

鐵腸居士……末廣重恭君

政治小説の魁春雪中梅を以て有名なる花間鶯を以て有名なる落葉のはきよせを以て有名なる鐵腸居士は當世第一流の政治家なるにも拘はらず兼て文學の思想に富み又小

説を巧にせり氏が著書は廿三年未來記以來不思議に世間の評判よくその出版あるごとに例も大當りを取れりといふ然れども氏の文章ゝ未だ有難しといふべからず氏の趣向は未だ奇妙なりと稱すべからず只時好に投じ人氣を圖りて筆を把らるゝが長所なるのみ而して世人の氏が小説を珍重するも亦其文章にあらずして君が人爲を信ずるのみ底で以て君も亦た多技多能の人なるかな

柳浪子……廣津直人君

柳浪子は近時熱心に小説を著はし追々上達せらるゝ由然れども氏が小説は殘菊に止めたり殘菊の趣向は一種毛色變り悲哀的の趣向なり其肺病を煩ひて情人に先立ち奈落に落ゆく所などは中々に旨しといふべし(實地經驗せしも

のはなけれど都て小説の想像は皆な斯くありたきものぞかし蓋し餅屋にして餅を搗き味噌屋にして味噌を蒸すが如きは是れ常人の業なるのみ抑浪子の苦心して斯る境界を描出せしは頗ぶる趣ありといふべし但し其他の名著中これに勝れる物あるや否や我れ多忙にして其處までは目が屆かざるなり

採菊散人……條野傳平君

散人の小説は老練なり其翻譯的の味なきものを鰹魚と味淋で煮ころばして甘く人に喰せる手際なかなかに感ぜべし夫れもその筈散人は以前山々亭有人と稱し昔把つたる筆柄の力あまりて近頃も續々新作を物さる、由あ、散人が舊友たる藍泉氏は早既に世を去りぬ魯文翁は世にあるも

今は著述の業絶えたり獨り散人の壯なる筆新前より引續きて今尚ほ瞿鑠たる健筆を明治の文界に揮はる、は最あるがたき名人といふべし

漁山人……（姓名不詳）

漁山人は硯友社中の才筆家なり嘗てえば〳〵小説を著はせしや否やは我れ之を知らぬといへども近來は又院本の取調に從事し西洋の戲曲と我國の淨瑠璃とをチャンポンしたる一種新体古今未曾有の新淨瑠璃を發明し之に專賣特許を得て弘く賣捌かんとするの計畫ある由その本願の成就したる曉は多少我國の文學を稗益する所あるなるべしア、當世は諸事發明の世界かな徒らに古文舊作に戀々して古人の奴隷となるが如きは亦意氣地なき業といふべ

し余は藥湯に入りたるごとく姑らくジッと辛抱して山人が下日大いに爲す所あるを見んと欲す

櫻痴居士……福地源一郎君

居士は實に文章家なり特に太平記及び平家物語等の文に巧なるを以て世に知らる其流暢秀麗なる例へば吉野の川の清流に秋の錦を流せしごとし啻に文章のみならず又併せて小説を作れり嘗てもしや草紙を著はして大いに當世を諷刺したりと又居士は院本をも添刪せり先に歌舞伎座において興行せし關八州繋馬は名高き近松の作なりしを居士氣に入らぬ所ありとて自から之れに改刪を加へ段を直し蹄を磨きて頗ぶる名馬となせしといふ實に居士は文界の伯樂なるかな近松が千里の名馬は世に多く散見すれど

も櫻痴居士てふ伯樂は世間まことに稀なるべし斯る作者の世に出るも亦是れ太平の餘澤なるべし穴賢〳〵

霞亭主人……渡邊勝君

氏は當時大阪朝日新聞社の立者なり嘗て東京朝日新聞社に在りて健筆を揮ひ彼の美妙齋主人の胡蝶に對する阿姑麻てふ小説を作りて大に喝采を博したりと氏はなか〳〵に文章家なり特くに小説の文章家なりその阿姑麻の文章の如きは雄健艶曲人以て神となす我れ甚だ此種の文章を好み其小説を讀むと數回而してます〳〵妙味を覺ゑり然れども其後氏の小説として更に目覺しき述作はまだ見ぬ戀の恥かしながら多く世間に發表せざれど當世の作者中氏に優る健筆家は多く其人を見ざといふ蓋し氏が主義

は拙速ならん而して其文は巧速なり新聞社の小説家にはお誂への人といふべし又德用向の作者といふべし

幸堂得知……鈴木利兵衛君

三馬の滑稽を鵜呑にして一九の洒落を尻から瀉出し當時我股間を窺ふものは臭き文學社會に於て蓋し其人なかるべしと内々悅喜せらるゝ人は正に幸堂得知氏ならん得知君の滑稽は實に天下一品なり幸堂ぬしの諧謔は寔に當世絕無なり彼の新小説に掲載せし君が得意の短篇小説こゝらべ狐の鞘當を讀みたるものは蓋し其技倆を知るなるべし而して氏は又深く劇道に通じ折節役者評判記を國民新聞紙上に出せり然れども其評判記の果して評判あるや否やは我れ保証するとを得ぞ蓋し地方の看客は東都梨園

の摸樣を知らぞ其知らざる人々が知らざるものを讀みたりとて亦何の可笑味あらんや新聞紙の劇評と當世の羽織の丈とは短かきを以て粹なりとす幸堂ぬし幸ひに是等の点に御注意あらば君が著述は出るごとに皆大當りを取るなるべし

青萍居士……末松謙澄君

青萍居士は翻譯家なり眞の作者とは言ふべからぞ然れども其傑作谷間の姫百合に至りては平凡の作者輩が企て及ぶべき所にあらぞ或る新聞の先きに之を評して曰く是れ谷間の姫百合にあらぞして岩間の鬼百合なるべし抔と太く攻擊を試みたれども兎に角か、る大冊を譯述さる、腕前こそ實に感心の至りといふべし只其篇の文中にお國訛

りの折々交りて可笑き所の多かるは素人細工の常右衛門いぢめられても看客はヒヤ〳〵〳〵と褒るなるべし

著者曰此外尚ほ記すべき作者の腦中に浮びし者數名あれども餘り根氣をつかひては病の障碍になるべしといふ醫者の忠告に任せて筆を擱す尚ほ病氣平癒後は舊の如く商賣一途に勉強致せば不相變御引立のほどを伏て乞ふ頓首再拜向後謹言

當世作者評判記終

明治廿四年二月五日印刷
同　年同月七日出版

著作兼發行者　大坂西區京町堀通二丁目百三十九番邸　吉田伊太郎
印刷者　大坂東區平野町四丁目九十一番邸　喜田甚太郎
發兌元　大坂西區京町堀通二丁目　書肆　大華堂

版權所有

吉田香雨編輯

小說文範

初編 正價金拾二錢　二編正價金八錢
三編 正價金拾二錢　郵税各二錢
合本 正價金卅五錢

右初編には曲亭馬琴○山東京傳○八文字舍自笑○江嶋其磧○式亭三馬○十返舍一九○風來山人を始め其他の名人大家が物せし小說中の妙文辭及び近松門左衞門○近松半二○竹田出雲○並木宗輔○三好松洛○紀海音○爲永太郎兵衞○西澤一風等の名作にかゝる院本中の美辭妙言三百七十餘種を揭げ第二編には右と仝樣なる金玉の文辭數百種と和漢洋古哲格言數拾種の外に最も絶妙なる諸名家の戲文數十章を記載したり又た第三編は特に日本戲文鑑と稱し四方赤良○蜀山人○六樹園宿屋飯盛○手柄岡持○半掃庵也有○金鶏道人○風來山人○山東京傳○花笠文京○平秩東作○嶋田金谷等最も世に有名なる作家の戲文數百種を拔萃し贊、銘、序、跋、題、辨、箴、辭、記、文、論、說、書、賦、頌、解、賀文、祭文、吊文、祝辭、引札、口上、道行文、和詩等の部門を分ち載せたれば文學上最も有益無類の珍書たり乞ふ四方の諸君續々御愛顧あらんことを

附言右初編の如きは大方の御好評を蒙り忽ち初版再版とも賣盡し既に第三版に及びたり二編幷びに三編も目下再版に着手中是れ論より証據といふべし依てます〳〵御愛讀を賜へと白す

芝尾入眞道士著

かげろふ

全壹冊　郵税金四錢　定價金貳拾五錢

繪畫挿入頗美本

是れ近時評判高き文明的の人情悲哀小說なり其作意の巧妙なる其文章の艶麗なる一讀の下人をして實地その悲境を知らしめ思はず落涙を催ほさしむ其著者芝尾喜多夜叉君は後來有爲前途多望の才を齎らして今既に世を去れり君が妙想の小說は今後再び見ることを得ざ嗚呼君はこのかゝろふを著述して既に蜉蝣の夕をまたぬ身となれり世間君を知る人は勿論知らざるも又本書を見て君が紀念と爲し玉へゝ幸ひ甚しかるべしと云

角藤定憲君著

剛膽之書生

全一冊

定價　金貳拾錢
郵税　貳錢
頗美本
好体裁

是れ大日本壯士改良演劇會の會長角藤定憲君の名著なり本書の一たび世に出るや其評判喧すしく竟に之を狂言に仕組みて作者自から大坂新町座の劇場に興行し頗ぶる喝采を博せしより其後各府縣に於て又之を興行し到る所の地において大いに評判を博せりといふ實に有名にして面白く且愉快なる小說といふべしこの書も亦た再版を賣盡し今や第三版を出版するの幸運に及べり乞ふます〳〵御愛求御高評あらんことを謹んで白す

大二賣捌所

大阪心齋橋筋備後町　吉岡平助
仝　北久太郎町　梅原龜七
仝　本町東へ入　柳原喜兵衛
仝　北久寶寺町　岡嶋眞七
仝　安堂寺町　仝寶文館
仝　平野町南へ入　青木嵩山堂
仝　北詰北へ入　中村正兵衛
仝　順慶町南へ入　駿々堂
仝　博勞町南へ入　兎屋支店
東京日本橋通四丁目　中川勘助
仝　通三丁目　春陽堂
名護屋　岡嶋支店
長崎　東雲堂
備後町四丁目　安中半三郎
瓦町心齋橋筋角　岡嶋支店
博勞町心齋橋筋　中村峯雄
南本町東堀　平井新聞舗
浪花橋南詰　日本新聞會社
心齋橋筋備後町　開運堂
仝　本町北へ入　此村彦助
仝　南久太郎町南　赤志忠七
仝　北久太郎町東　中嶋德兵衛
仝　南壹丁目　岡本仙助
神戸元町　松村九兵衛
仝　吉岡支店
京都寺町通四條　船井新聞舗
仝　寺町通松原　田中治兵衛
改進堂